

西陣織

[コラム]

高級織物は、京都が日本の国府となり、朝廷を中心とする貴族文化が花開いた平安時代（794～1185年）から京都で生産されてきました。凝った装飾が施されることが多かった絹の衣装は貴族から支持され、この需要を満たすために、次第にこれを専門とする産業が発展しました。

織物産業、さらには京都全体が、長期にわたる政情不安をもたらした内戦「応仁の乱（1467～1477年）」によって荒廃しました。しかし1500年代までには、職人たちが京都に戻り始め、堺（現在の大阪近郊）といった港町で受けた外国の影響など、新たなアイデアや洞察を持ち帰りました。

応仁の乱の際に京都の西側を掌握していた軍によって占領されていた場所に、新たな織物工房群が出現しました。西陣という名に改められたこの地域は、やがて職人が作り出す高品質な絹織物と切っても切り離せない縁を持つようになりました。西陣織という言葉は、この地域で生産される手織りの絹織物を指します。

西陣織の着物、帯、着物装身具は1500年代から江戸時代（1603～1867年）までの貴族や支配階級の武士に重宝され、地位の証しとなり、西陣の職人たちは大いに豊かになりました。

現在の西陣織にかつてほどの需要はありませんが、西陣の織物産業は活気を残し、伝統的な構造を維持しています。製織の工程は絹糸の選定や染色から、デザインや装飾、さらにはジャカード織機での機織りまで、生地製造プロセスの各段階は、さまざまな専門職人グループによって行われており、それぞれの工房が近所に点在しています。

西陣織の多くは複雑なデザインを特徴とし、職人の創作力次第である一方、花、鳥、昆虫といった自然をテーマにした要素を取り入れたものがとりわけ一般的です。生地には自然な光沢があり、デザインが鮮やかに表現されます。さらに織物の中には、金箔や銀箔でコーティングされた漆和紙の細い撚糸を使って織られているものがあり、贅沢な印象を与えます。

織成館では、西陣織の歴史を学び、完成した織物を見学することができます。また、現地の工場ツアーにも参加することもできます。西陣織職人による実演は西陣織会館で行われています。